



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵  
令和六年九月 第三百三十八号

## 山田太一さんのこと

昨年、八十八歳で亡くなられた脚本家、山田太一さんのエッセーを、今ごろになって読んでおります。どういうきっかけで読むことになったのかわかりませんが、とても楽しいひと時です。そして心も少し落ち着きます。

しゃべり言葉のようにわかりやすく書いておられるので、つい勘違いしそうになるのですが、わかりやすい文章を書くのは、とても努力のいることで、彼の原稿用紙は、きつと推敲と削除で汚れまくっているのだらうなと想像します。

### 「男たちの旅路」

最初に彼の名前を知ったのは、もう何十年も前に放映された「男たちの旅路」というテレビドラマでした。内容は、昭和四十年代の、ある警備会社の上司と若い部下たちの葛藤を描いた物語でした。上司はかつて戦時中に特攻隊にいた男で、鶴田浩二さんが渋い演技をしておられました。彼は若くして特攻隊で死んでいった戦友のことが忘れられず、彼らを弔うように、そのことを心の中心に置いて生きています。だから生き方に迷いが無い。一方で、戦争を知らない若者たちがいます。うわついて、チャラチャラしていて、周りの空気ばかりを気にして、生きることには不真面目そうに見える。上司はそんな若者に対して、「俺は今どきの若い奴らが嫌いなんだ」とはつきり言います。時には殴りあったりもします。でも若い人たちだって、戦後の混乱の中で育ってきたので、どうやって生きていけばいいのか、表に見えないところで悩み、悲しみ、もがきながら生きているのです。だから若者は若者なりに、戦中派を揶揄（やゆ）したり、こころの片すみで興味をもったり、いろんな思いをもっているのです。それをドラマにして、迷い続けて生きている私に問いかけてきました。

### 山田太一さんの人柄

人前で話されることは、あまり得意ではなさそうですが、私は彼の話ぶりがとても好きです。時々目をこすったり、頬をなでたり、なにか落ち着かないというか、恥ずかしそうに、そして言葉を選びながら、オドオドとした感じで話されます。けどとても暖かい感じがします。そして時代を見る深いまなざし。

人前で話するとき、山田さんのように、聞く人を安心させるように話せたら、なんて素敵だろうと思います。

印象的だったのは、ある日、脚本家養成所で若者に話されたエピソードです。

「あなたたちは自分について、身体や性格、境遇についてマイナスを持っていますとおもいますか？ そのマイナスは、脚本家になるための資格であり、将来の宝物になるのです。人生にマイナスを感じていない人は、今すぐ脚本家になること

をあきらめたほうが良い」

### 寺山修司さんとの仲

山田さんは、学生時代、同級の寺山修司さんと気が合ってよく話したと書いておられます。語り合った後も、しゃべり足りなくて手紙に書いて送ったとも。二人が友人であったことに軽い驚きがありました。二人は私にとって対極にあるような存在だったのです。

寺山修司さんは、天井桟敷の劇団を率い、独特のシュールな短歌を作り出し、当時の前衛芸術の旗手でもありました。彼の映画を見に行った時、スクリーンいっぱいには置時計が映し出され、三十分ほど、ずっとその時計を見させられました。そのあと、彼がステージに出てきて、ボソボソ話をするというイベントでした。彼はいつも世間にスキャンダルをまき散らし、とても目立つ存在でした。彼は自らの才能をいつも前面に出して、注目を浴びる存在でした。

それに対して山田さんは、まるで一人一人の足の裏に刻まれている悲しみや憎しみや、どうしようもなさを背負って生きている人間を、その一人一人について表現しようとする芸術家です。

ある時、彼は「ドラマのテーマは、劇的なことではなく、隣にいる肉屋さんの夫婦が、どうして結婚して、今ニコニコしてお店をやっているのか、ということについて書くべきだ」という言葉を紹介して、ドラマのあるべき方向のヒントを得た、と語っていました。

芸術表現の前衛にいる寺山さんと、人知れず、人間の心の奥にひそむ苦悩や思いをドラマにする山田さん。その二人が学生時代に友人だったとは。

今後、もうすこし彼の作品に付き合いながら追悼したいと思います。